

漁師の家

「海は嘘をつかん。」

山崎 政夫

聞き手・北井千恵 鳥毛結衣 (石川県立飯田高等学校2年)

子どものころから慣れ親しんだ海

昭和22年1月11日生まれ、66歳。出身地は狼煙^{のろし}、職業は漁師。家では民宿もやっとする。家族構成は、ばあちゃん、うちら2人、子どもが2人。趣味は車でドライブとか、港周りをね、港の形とか船を見るのが大好き。

小さいときはいろんなことをした。海ばっかし行ったり。潜ってサザエを採ったり、おじいさんに船に乗せてもらったり楽しかった。小さいときから海が好きやさげ漁師になりたかった。でも、中学校終わってから、漁師になるまでは、大工の見習いを3年間してから能登町の山田造船へ2年余り行って糸魚川の斎藤造船所でFRP（繊維強化プラスチック）を習ってきて、そこでその後自分で独立して、船を造った。始めは木の船を作ったけど、途中からプラスチックの船になった。科学製品を使うもんやさげ、家内の体によくないから、やめた。

漁師になるために修行とかはしてない。子どもとっから

自然に身体に覚えた。ずっとちっちゃいときから、海へ行つともんやさげ、いつから漁師になったとかって区切りがない。だけど本当に始めたがは、親父が亡くなったし、民宿と大工の仕事が合わなかったさかい。

漁師としての生き方

前はサヨリ漁もしてたね。今はサヨリいなくなったからしてない。2船で普通のやり方じゃあんまり獲れなくて、網を引っ張って捕まえた。今はね、カワハギを獲るとる。今日は大量で400キロあまり。隣のおばちゃん、お母さん呼んで、7人か。それ網からはずいた。まあ、かかったのは500キロ近いね。一匹一匹みんな手で取って、獲れた魚を氷の中へ入れて、魚を冷やいて、少しでも鮮度をよくしなきゃ魚が傷むんだ。蛸島の珠洲漁協に出荷する。獲れた魚はほとんど売る。うちにお客さんがおる場合は、お客さんの分だけ取って、それ以外の残ったのを売る。

魚を獲りすぎると値段が安くなってしまいうさげ、漁師仲

間、漁業組合で、4月から9月までは土曜日を休みにみんなで決めて、週に1回、海を休みにしとる。

私ずっと前から、船団長をやっとるもんやさけ、どんな漁でもしとる。みなさん共同で一斉に、時間を1時に出港って決めて、停泊して、そいで私の号令によって網を一斉にやって、漁をする。

漁では毎回失敗しとる。海の事故は、1件も起こいたらだめ。命に関わるさけ。やっぱり網をなぶるさけ、ブロックとかそういうのに怪我をしないように気を付けとる。私も、62歳くらいのおとこかね、指落といた。でも、命助かったさけ、こんな指くらいどうでもいいわーって。

天候を見る

春にはね、ハチメ、メバル、それからタイ、ブリ、いろんな獲れるよね。天候がいいときは忙しい。6、7、8月そこらが一番かね。去年までは田んぼも作ってたけど、漁師の仕事と忙しい時期が重なるさけ、田んぼはやめた。網って言ったら、魚ごとに決まった、おうた網使う。色もいろいろね。ハチメを取るなら赤色とか、色を指定して、ほいで使う。色によってこの魚が獲れやすいとかあるんや。網を使った漁以外には、釣りをしたりする。去年アオリイカたくさん釣ってん。ブリ釣りとか、引き釣りをする。

今はテレビや携帯電話に天候がわかるけど、漁師やったらこの風が吹いたらしげが来るぞとか、そういうことは身に付いとる。言葉では言いにくいけど、風てが、北の風、南の風、西の風ってがまわりかたが決まっとる。そやさけ、その風を見て、あ、この風なら潮の流れが速いとか、今日はこれからしけてくるとか、その風を見てだいたいわかる。漁はその日によって海の状況、潮の長いとき早いときとか、それから天

候のわるいときは、沖に出たり磯におったりしとる。今は、自分の経験プラステレビなりの予報を掛け合わせて見とる。台風は来るときは早めに漁は打ち切ってしまう。で、ほかの人にももうダメやぞって伝える。

普通、年中漁をしとるけど、冬の間はここ能登半島の先端やさけ、波風が強いでしょ。やからあんまり、沖へはいけん。でも、海の波がおさまれば風のいい日は沖へ行く。この能登半島は寒い所の半島で、ほんとはもっと貧乏なはずなんだけど、やっぱり海からの恵みで生活たてられたのは、漁の仕方が優れとってんろうと思うわ。

冬でも魚は獲れる。毎日行っとったら、魚さんも慣れてしもうさけ、たまに行ったらかえって量が多い。その時期その時期で獲れる魚が違うしね。私がやっとる刺し網漁やったら、天候を見てかって、今日は潮がいかん、今日は波が早い、だからどこへ行って漁をする。って、家におる間にもう考えとく。考えといて、今日は潮がいかんぞって思ったら、沖合の魚のいそうな所に停まる。潮が早いときは、潮がなるべくいかない近場とかに船を停めて漁をする。

漁師の一日

一日の過ごし方は、朝起きるのは4時ころね。自分の仕事やさけ、やっぱり気をもって仕事をやっとるもんやさけ、まっ朝起きるのがつらいとかそういうことはないね。それからコーヒー飲んで、家内を起こいて、そいで市場に行って、5時になったら魚を出荷して、そして船の後ろに網積み付けて、そんで帰ってくるのは8時ごろ。8時ごろから12時ごろまで休んで、そいから、海へまた1時ころ出航して、帰ってくるのは3時ごろ。それから少し休んで、そいでまた6時になったら海へ出航、帰ってくるのは9時。その日その日の



(左) 網をあげている様子



(上) 網をなおす山崎さん (右上) 素材の味を活かした料理 (右下)「漁師の家」

魚の量によって寝るのは12時になるときもあるし、1時2時になるときもある。それから魚をはずいて、それで朝5時になったら市場に魚を出荷して、それが一日の繰り返し。

自慢の船

船の名前は鳥海丸。うちの親父が北海道ヘイカ釣りに行ったときに、海から見たら、秋田県の鳥海山がものすごい綺麗ねんと。それで船の名前が鳥海丸になった。いい名前でしょ。欲もなく。今の鳥海丸は、8代目。

今は船の設備もいろんなのがあるさけ、昔は2、3人乗ってないと漁ができなかったけど、ひとりできるようになります。今は船はプラスチックになったでしょ。30年や40年はもつね。木の船なら耐久年数だいたい10年ほどやったけど、今の船は30年以上たっても大事に使うとる。スピードも結構速いし、エンジンを大事にしとる。エンジンはオイルが生命線やからね、オイルは周期的に変えてる。

だいたい1枚の網で1年しかもたん。1シーズンしかもたんげん。「つづくり」っていう、網がね、岩場で破けたがを、全部ではないけど、手作業で直す。

「漁師の家」を切り盛りする

民宿はおじさんの代からやとる。1泊2食付きで500円の時から。石川県の民宿では古いほう。春は連休、夏はお

盆前ぐらいが一番混む。なるべく、前に来た人を泊めとる。何十年もお付き合いしてる人とかね。農園やとる人とかからは、イチゴとかメロン、スイカやらそんないろんなものを送ってくる。

ふるさと夢学校っていう活動で、かわいい中学生が4、5人泊まりに来て、ホームステイちゃうか、家族同然に一緒にご飯食べたり、いろんなことをした。2、3年は続いたよ。漁は危険だから行かないけど、魚を網からはずすのには頭をつかうから、手伝いをしてもらった。楽しいよ。でも、別れるのはつらい。みんな泣いとる。こっちは胸がじんとくる。

民宿では、獲れた魚を使って料理をしたりする。家内が料理して、お客さんに出したら大変喜んで。野菜も全部家で作とる。去年までは、ばあちゃんが作ってたけど、今は家内が作とる。大変やね、野菜作るってね。

民宿の名前は「漁師の家」。連休になってたくさんお客さんが来た時に、泊まるのがなくなってきた。それで、もともと旅館予約して来とるがに、うちへ予約するがになってん。民宿の許可もないがにお客さん泊まるのは駄目やさけてことで許可とって、年寄りが集まって、どんな名前にするって考えて、漁師してるから「漁師の家」になったんや。

お客さんはやっぱりここで獲れたものを食べたいみたいや。買ったものとかそんなじゃなくてね。お刺身と焼き魚とだけは、ちゃんといいものを出そうって気を付けとる。素材の味を生かした煮るか焼くかっていう、そういう程度の料理。

後継者不足に悩む

漁師するひとはおりません。だれかに続けてほしいけど、漁師の生活をするのはやっぱり大変。魚がやっぱりだんだんいなくなるでしょ。そしたらそれなりに魚をとってこんなさげ生活が大変やと思う。定年退職して帰ってきてかって、好き勝手楽しんでやとる人はおるけど、漁師する人はおらん。結局生活かかるとるさげ、漁するが大変ねん。水揚げない日はお金にならんし。漁師になるために必要なことは、朝早く起きるとか、時間を大切に、天候を見たりやね。

それから、感覚的に、海好きな人ってのは、小さいときから船に乗ったりしとる。身体に感覚的に覚えてしまっただけと。身体に感覚的に覚えてしまっただけと。大学出たからって漁師になれるわけじゃない。よけ難しいわいね。子供の時からやってないと漁師になるのは難しい。やっぱり漁師の見習いってか、習って、身に着けんことには危険や。そんで、漁師は自分だけで出来る仕事もあるけど、私やったら、家内、家族の手がいるもんもあるさげ、なかなか難しい。わが息子でさえもやってくれない。私だけで後継ぎはおらん。ばたんするまで漁は続かんため。

海の魅力

海は嘘つかんもんね。なんせ海好きやし。あっさりする。毎日見とつても海は違うさげ。どこへ行っても海ばかり。もし1日だけでも海を見ない日があっても、つらい。苦しくなる。だから旅行に行っても、「どっか海ないか」って。海の周りの海岸ずっともうて歩きん。海岸見て港の作り見て、あそこの港はこんな作り。あそこはこうやって、みんな頭の中に入るとる。毎日ほとんど海行とる。しけるときがあんまりないから、土曜日以外は行きますね。海では、今日は潮が良くないとか、魚とれそうやとか、海の機嫌がいいとか、悪いとかって感じる。自分の時間が作れるっていうか、嫌なときは海に行かなくてもいいけど、頑張るときは頑張れる。一日一日違うから。だから漁は楽しい。

[取材日：2013年8月22日・11月4日]

PROFILE

山崎 政夫 やまさき まさお

昭和22年11月11日・67歳・漁師、民宿経営

漁師の家に生まれ、幼いころから漁に出ていた。漁師になる以前は船大工に従事していた。長年にわたり、能登半島最先端である狼煙で沿岸漁業、主に刺し網漁に従事しながら、民宿「漁師の家」を営んでいる。農業にも従事している。



● 取材を終えての感想 ●

取材を始める前はすごく緊張していたけれど、優しい雰囲気の名人さんと奥さんのおかげで、リラックスして取材をすることができました。とても親切にさせていただいて、楽しく取材を終えられました。こういう優しい人柄を持った名人さん達だからこそ、長い間民宿を経営し、船団長を続けてこられたのだと思います。取材中の名人さんの、「海は嘘をつかん」という言葉がすごく印象に残りました。名人さんの口から自然に出た言葉で、漁師ならではの、心に残るいい言葉だと思いました。漁師さんは正確に天気を読むことを取材中に実感して、驚きました。こんなに長い文章をまとめるのは大変でしたが、自分にとっていい経験になりました。取材には、聞くだけではなく、相手とコミュニケーションをとることも大切だとわかりました。1回目よりも、2回目の取材の時はうまく名人さんの話を聞き、コミュニケーションがとれたと思います。写真の撮り方や、文章整理の方法は、これから役立てていきたいです。

(北井千恵 写真：左)

今まで「聞き書き」みたいな経験はしたことがなかったので、最初はインタビューがうまく出来るか不安でした。でも、山崎さんはとても優しく親切にしてくれました。取材は、話を聞いているときに、他にどんな質問をしたらいいのか考えることがとても難しかったです。でも、山崎さんはたくさん質問に答えてくださったので、楽しく出来ました。取材中、山崎さんは本当に海が好きで漁師をやっているということが実感できました。山崎さんは海で事故にあったことがあるのに漁師を続けているのはすごいと思いました。それに、漁師という仕事は、本当に海が好きじゃないと出来ないことだと思いました。写真を撮らせていただいたときも、網を直すところを見せてもらったりしてわかりやすかったです。パソコンで打ちあげてまとめるのは、方言も混ぜっているので大変でした。でも、研修では他の生徒とも仲良くなって楽しかったです。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。(鳥毛結衣 写真：右)